

復活節第五主日

2011.5.22

ヨハネ 14・1-12

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」私たちになじみ深い、みことばです。けれども、私たちになじみ深いイエスのこのみことばは、日々の生活を生きる私たちの心に、どれほど深く食い込んでいるのでしょうか。そのことを反省するために、これに続くみことばが、私たちの心にどのような反応を引き起こすか反省してみたらよいかもしれません。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」というみことばに続けて、イエスは「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない。」と言われるのです。このみことばは私たちをたじろがせます。私たちが生きる日本の社会の中で、キリスト者ではない人々を前にして、みことばのこの部分を公言することに気おくれとためらいを感じてしまうのは、私だけのことでしょうか。今日の福音のみことばのこの部分までの箇所は、葬儀の儀式書の中で、朗読指定箇所になっています。「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」というみことばまでは、通夜や葬儀の場で、亡くなられた信者の方を悼みつつ、お送りするのにふさわしいみことばで、参列しておられる皆さんの心にも届く聖書のみことばであると思います。けれども、それに続く「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない。」というみことばは、信者ではない参列者の方々の心にはどのように響くのでしょうか。このみことばは、その方々の心を凍りつかせてしまうように私には感じられて、どうしても、このみことばの最後の部分まで朗読することが出来ません。キリスト者として神のみもとに召された方と、その方の死を悲しむ信者ではない参列者の方々との間を、このキリストのみことばは引き裂いてしまうように感じられないのでしょうか。キリスト者ではない参列者の方々が、葬儀のその場でこのようなみことばを聴く時、キリスト者であった、自分たちが愛するその人が自分たちとは縁のないところへ行ってしまったと感じられるのではないのでしょうか。キリスト者になるつもりのない、ただただ自分たちにとって大切なその方の信仰を尊重して、悲しみのうちにお見送りするために教会の葬儀の場に参列しておられる方々にとって、このみことばはあまりにも残酷であるのではないのでしょうか。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」カトリックの信者として私たちはこのイエスのみことばを信じています。けれども、このように言われるイエスを、このみことばのままに信じることが、この日本の社会に生きる私たちに何の異和感も何の苦痛も感じさせないとしたら、私たちは骨の髄までカ

トリック信者になりきることが出来たか、あるいは、まだ本当には、このイエスのみことばを受け入れてはいないかのどちらかです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」と呼びかけてくださったイエスに向って、「あなたこそ、私にとって道であり、真理であり、いのちです。」とお応えすることが、カトリック信者としての私たちの信仰です。このような信仰を受け入れて、それによって生きるためには、私たちは自分の人生に向かい合わなければなりません。「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」という呼びかけは、私の人生に向けて呼びかける招きであり、それに応えるということは、その招きに私の人生を賭けるということだからです。

家族や、職場や、友人たちとの人間的な絆の中に生きる私たちは、その中に生きる自分に目覚めなければ、本当の意味で自分の人生に向かい合うことはできません。自分一個の人生に目覚め、それと向かい合うということは、人間的な絆を大切にすること对于我们にとって勇気のいることです。私たちが自分の人生に目覚め、それに向って歩み始めようとする時、お互いの絆を大切にすること人間関係の中で軋轢を経験せざるを得なくなります。そして、その軋轢は私たちの心に悲哀をもたらします。けれども、人は皆こうやってそれぞれの人生を生きているのではないのでしょうか。そうやって、それぞれの人生を生きるお互い同士が縁あって絆に結ばれ、支えあって生きているのではないのでしょうか。

人間同士のお互いの絆が、私たちににとってどれほど貴重なものであっても、それぞれの人生を生きる私たちにあって、それが最終的に自分の人生を支えることができるものではないことを私たちは知っているはずで、愛する人の死が、私たちに深い悲しみをもたらすのは、私たちが支えていたその人との絆を死が奪い去ってしまったことを知るからで、私たちが真の意味で、自分の人生と向かい合うのはそのような時かもしれません。今回の大震災によって、そのよう悲しみの中に投げ出された人々の姿は私たちの胸を締め付けます。愛する人の死を前に呆然とたたずむその人々の姿は、形こそちがえ、私たちの経験でもあるからで、

そのような悲しみの経験を通して、自分の人生に向き合わざるを得ない私たちに、イエスはあのおことばを語りかけてくださるので、「わたしが道であり、真理であり、いのちである。」

イエスが道であるのは、支える絆を失って、自分の人生の行く手を見失った私たちに道を開いてくださるからで、

イエスはどのようにして、私たちの道となってくくださるのでしょうか。十字架の死を越えて、御父のもとに行かれたイエスは、そのいのちの世界に私たちを向かえるために、私たちのもとに戻ってきてくださったので、それがイエ

スの復活です。その復活によってイエスは私たちの道、真理、いのちとなってくださったのです。イエスのあの十字架こそが、御父のいのちの世界への道であることを、復活のイエスは私たちに示してくださったのです。私たちが経験している全ての苦しみをイエスはあの十字架において、ご自分の痛みとしてくださり、そうすることによって、私たちにはその意味が分からない、私たちの全ての痛みにも意味があることを示してくださったのです。私たちの全ての痛みは、イエスの十字架の痛みに関われることによって、イエスの御父である神に受け止められていることを示してくださったのです。

「わたしは戻って来て、わたしがいるところにあなたがたを迎える」復活のイエスのおことばです。私たちの全ての痛みを、ご自分の十字架の痛みによって知ってくださったイエスは、痛みの中にある私たちのもとに戻って来て、私たちに御父のいのちの世界に迎え入れてくださるのです。私たちにとって最後まで謎であった、この世の痛みの意味を解き明かすことができるのは、十字架の死を越えて復活されたイエスだけです。「わたしは真理である」と言われるイエスを、私たちの人生の中に迎えることによって、私たちに理解できなかった私たちの人生の謎はなくなり、いのちに満ちた真理の喜びを知るのです。私たちの痛みの全ては、出口のない闇に終わるのではなく、復活のイエスがそこに私たちの迎えてくださる、父なる神のいのちの世界への道であったことを悟るからです。

そのいのちの世界で、私たちはこの上ない喜びを味わうことでしょうか。「わたしの父の家には住むところがたくさんある」というイエスのことばに慰められるからです。この世の痛みの中で、御父が結び合わせてくださった絆によって互いに支えあって生きて、愛する者たちのためにも場所が用意されていることを知るからです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」この今日のみことばが、私たちの体の中に、血の中に、深く、深く、浸み込んでゆくことを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高